

「ともだち」

作 中堂大嘉

【あらすじ】

青森の田舎から上京したハルオ。ハルオは俳優として活躍することを夢見ていた。しかし、
現実には厳しくなかなか芽が出ない日々を過ごす。

東京での生活に疲れ、人間関係にもどこか寂しさを感じるハルオ。満員電車で揺られなが
ら、ハルオは田舎のともだちのことを思い出していた。

ともだちってどんな感じだったっけ？

【登場人物】

ハルオ (20) (25) 俳優

マサ (20) ハルオのともだち

平井 (35) ハルオのマネージャー

松本 (20) 居酒屋のアルバイトスタッフ

都会の人々

店長

1.

コンビニの前で煙草を吸っているハルオ（20）。

ハルオ「ともだち。ともだちが好き。知り合いじゃなくて、ともだち。何者でもない、ともだち」

マサ（20）、コンビニから出て来る。

ニヤニヤしているマサ。

ハルオ「なにニヤニヤして」

マサ「いや、ちよつとな」

ハルオ「なによ」

マサ「あの店員さん……わあのこと好きかも」

ハルオ「は？」

マサ「やたら笑顔でさあ」

ハルオ「仕事だべさ」

マサ「いやー、仕事を越えた何かを感じたわ」

ハルオ「なにそれ」

マサ「結構かわいがったしなあ」

ハルオ「え？ マジ？」

マサ「うん」

ハルオ、コンビニをチラッと見る。

マサ「見てこいって」

ハルオ「いいじゃよ」

マサ「いいがら見て来いって」

ハルオ「えー。しょうがねえな」

ハルオ店員を見に行く。

クスクス笑うマサ。

戻って来るハルオ。

マサ「どんだ？」

ハルオ「めっちゃブスだばん」

笑うマサ。

ハルオ「おめ、騙したな」

マサ「い、いやー可愛いかったけどなあ」

マサ、コンビニに近づき、店員の顔を見る。

マサ「さつき見た時、いがったんだけどな。角度の問題だべが」

マサ、頭を傾けたりして、店員を見る。

ハルオ「なにしてんの？」

マサ「待って……あ！ ここ！ ここやべ！」

ハルオ「うそだべや」

ハルオ、同じ体勢になって店員を見る。

ハルオ「いや、余計ブスに見えるわ」

ハルオ、マサ、笑う。

ハルオ、元の体勢に戻る。

マサ「……東京行ってもがんばれよ」

ハルオ「ん？」

マサ「東京行ってもがんばれよって」

ハルオ「どんな格好で言っちゃんずや」

マサ、元の体勢に戻る。

マサ「無理すんなよ」

ハルオ「……ああ」

マサ、コンビニ袋を渡す。

マサ「ほい、餞別」

ハルオ「おう」

マサ「せばまだな」

ハルオ「まだな」

マサ、その場を去る。

電車の音が鳴り響く。

ハルオ、つり革を掴む。

ぞろぞろとハルオを囲む人々。

ハルオ「青森の田舎から上京して五年目。今年で25になる。俳優として売れて、ドラマや映画に出て、好きなことで食べていく。そう決めてもう、五年。現実は厳しくて、まだアルバイトをしながら生活してる。一緒に舞台に出た出演者。今までのアルバイト仲間。芸能関係のお偉いさん。上京してから沢山の人に知り合った。本当に沢山の人に知り合った。けど、なんだか寂しかった。うっとうしかった満員電車も今じゃ少し温かい気がした。東京に来て随分たった」

電車の音と共に、ハルオを囲む人々、去る。

降りていく人々を見つめるハルオ。

2

カフェでデスクワーク中の平井（35）。

平井「もしもしー平井ですー……ええ……ええ……ええ。舞台のアンサンブル。ノルマが30枚」

パソコンを開く平井。

平井「いやー大きい舞台に出れるとはいえですねえ……ノルマがちよっと、んー」

所属俳優のスケジュールを確認する平井。

ハルオ、入ってくる。

ハルオ「お疲れ様です。すいません、遅くなりました」

平井「ま、知人の俳優も含め、ちょっと声掛けてみますね……はいー失礼しますー」

電話を切る平井。

平井「遅いよ」

ハルオ「すいません、乗り過ぎしちゃって。何か買ってきますね」

平井、コーヒーを指差す。

ハルオ「あ、すいません。ありがとうございます」

平井「映画のオーディションの件なんです」

ハルオ「はい！」

平井「ダメだった」

ハルオ「……そうですか」

平井「おれも頑張ってブッシュしたんだけどねー。でも、いい話もあってね。その監督がや
ってるワークショップがあるんだけど、そこなら参加してもいいって」

ハルオ「ああ」

平井「映画監督がレッスンしてくれるから、毎回レッスン兼オーディションみたいな感じだ
と思えばいいんじゃない？ なんかの作品で使ってくれるかもしれないし」

ハルオ「なる、ほど」

平井「監督もおれの知り合いだしさあ、どう？」

ハルオ「でも、お金かかりますよね？」

平井「まあねー。でもそんなによ。月1回で3万円。あ、初回だけ5万円か。でも映画監督
にみてもらえるメリット考えたらさ」

ハルオ「ちょっと、事務所のレッスン費もあるし、月々の支払いがこれ以上増えると」

平井「バイト増やせないの？」

ハルオ「いやー、ちょっと」

平井「そっか、了解」

ため息をつく平井。

平井、パソコンで監督へメール文を作成している。

平井「カフェとかどう？」

ハルオ「はい？」

平井「結局さあ、何が困るって金なわけじゃん。どうせバイトしてんだっただらさあ、自分で
カフェもって営業してみるとか？ 芸能人も大体副業してるしね」

ハルオ「……」

平井「聞いている？」

ハルオ「……はい」

平井「ん？ おれ何か変なこと言った？」

ハルオ「いえいえ、でも開くのにもまたお金かかるんじゃないですか？」

平井「そこはおれも多少協力するからさ、知り合いがいい場所貸してくれそうなんだよね。なんかできたらなあと思ってたんだよね」

ハルオ「あの、おれ……」

平井「ん？ でした？」

ハルオ「いや、何でもないです」

平井「そっか、まあ考えてみてよ。おれこのままここで作業するから」

ハルオ「はい」

平井「じゃあ、お疲れ」

ハルオ「お疲れ様です」

ハルオ、立ち上がる。

平井「あ、あのさ。舞台はどう？ アンサンブルでノルマあるんだけど、でかい箱に出れるんだけどさ」

ハルオ「いやー、ノルマはちょっと」

平井「そっか、了解」

平井を見るハルオ。

平井「なんだよ。どうした？」

ハルオ「いえ、なんでもありません。お疲れ様です。お先に失礼します」

平井「うい、お疲れ」

ハルオ、カフェを出す。

平井、パソコンでデスクワークをしている。

電車の音が鳴り響く。

ハルオ、つり革を掴む。

ぞろぞろと人々が乗車し、ハルオを囲む。

ハルオ「温もりの正体が分かった気がしたんだ。ワンナイトラブのような、一瞬の暖かさ。

心が冷え切った温もり。でも一瞬だけでも、優しく包んでくれる。ビジネスライクな温もり。そんな感じ」

電車の音と共に、ハルオを囲む人々、平井、去る。

降りていく人々を見つめるハルオ。

3.

ハルオを囲む松本（20）、店長。

松本「お疲れ様です」

店長「お疲れー！」

ハルオ「お疲れー」

松本「ハルオさん、来週の土曜って代わられますか？ ちょっと用事はいっちゃって」

マサ、登場する。

マサ「よ」

ハルオ「……よ」

おわり